

# 第十一回熊本大学附属図書館特殊資料展

## 肥後の博物学

平成6年10月30日～11月1日

博物学（略して博物ともいう）とは natural history の訳語で、動物や植物など自然物の記載と研究を主目的とする学問である。最近は自然史と呼ばれることが多い。博物学は森羅万象の一つ一つを他と区別し、その形質を確かめることを基本としている。しかし、それが生物学の主流であったのは19世紀末までであったため、博物学を時代遅れの学問とみる誤解も広く存在している。しかし、博物学は自然に対する好奇心と、自然の多様性に対する驚異心に発する学問であるから、我々が自然を愛し、自然の産物を好み、それらの研究によるこびを見出すならば限りなく続く分野である。

江戸時代は、鎖国という特殊な状況のもとに平和が長く続き、日本文化が花開いた時期である。その中でも、実利の追求ではなく、不要不急の事柄に好奇心を燃やす博物学の発展と、博物学と共通の基盤にたつてアサガオやツバキなど華麗な花を創出し、マツバランのような特異なものまでを鑑賞の対象とする際だった園芸の発達は、とくに注目に値する。

肥後の博物学の基礎を大きく構築したのは、第6代藩主・細川重賢（1720－1780）である。重賢が天性のナチュラルリストであった逸話は数多く語り伝えられているが、現在に残された図譜や押葉帳を見れば、まさに「論より証拠」で具体的に知ることができる。その精密に描かれた図、大きさなど測定値の記録、継続観察や文献などから得た知見を記入したメモなど、自然観察と記録の手法がまだ確立されていなかった時代に、驚くほど高いレベルに達している。

このような自然物に対する研究態度が、後に「肥後の名花」と呼ばれる熊本独特の園芸植物を生み出す基盤を育てただけでなく、藩校・時習館<sup>じしゅうかん</sup>、医学校・再春館<sup>ばんじえん</sup>、薬園・蕃滋園<sup>ばんじえん</sup>の創設から、産業の振興や藩政の改革などへと繋がっていたように思えてならない。

### 公開講演会

講師	熊本大学教養部教授	今江正知氏
演題	肥後の博物学	
日時	平成6年10月31日（月） 13：30～15：00	
場所	附属図書館会議室	

# 出品目録

## ◇永青文庫資料

### 1. 毛介綺煥

(整理番号 41号・赤215)

(大きさ33.5×29.3cm、折帖)

魚介類を主とする写生帖で、宝暦から天明の頃の作である。とくに実物大に描かれたエビ・カニ類の図は見事で、アサヒガニの図などシーボルトの『日本動物誌 (FAUNA JAPONICA)』に劣らぬ出来栄えといわれている。

哺乳類ではヤマネ、アナグマ、テンなどの図があり、採集年月日、採集地、その場の状況などが簡潔に記されている。とくに、宝暦8年(1758)に矢部郷で獲れたニホンオオカミは、正確な図とともに体各部の計測値までが記され、絶滅したと思われる本種の貴重な記録となっている。

宝暦6年(1756)に芦北郡久木野村(現在は水俣市)の山中で獲れたヤマネは、よく特徴をとらえた図とともに、生態や現地の呼称など捕獲者から得た情報や、関東ではヤマネと呼んで日光の山中に多いことも書かれている。なお、ヤマネはリスに似た日本特産の齧歯類で、現在は国の天然記念物に指定されている。

採集地は熊本県内に限らず、天明4年(1784)6月に熱海で湯治中に採集した修善寺桂川のカジカ、熱海で採集したテズルモズル(棘皮動物クモヒトデ類の一種)など、重賢が自然物に対して常に興味を持ち、採集し、記録していたことを示している。テズルモズルの精密な図には、「天明4年5月熱海ニテ長縄ノ針ニカカル生類ニテ動ク」と採集した際の記録とともに「桂川甫周(蘭学者で幕府の医員)老御蔵本紅毛ノ写生ニモ此物アリ蛮言カスケッテン」との追記があり、図をもとに調査を進めたことや、西洋の博物学が浸透してきていたことがわかる。また、ガラス瓶に入ったワニの図には「安永3年 紅毛人持来ダリヤウ」と記され、珍しい動物の記録というだけでなく、当時の外国との物資交流の中に、このような動物も含まれていたことを示す貴重な記録である。

その他にも、詳細に見れば見るほど驚くべき記録がびっしりと詰まっている。

本帖のほかに、動物に関しては、重賢が残したと考えられる『群禽之圖』、讃州侯(松平頼恭)の図譜(『游禽譜』という鳥類の図譜)から模写した『游禽圖』、『珍禽奇獸圖』などもある。

### 2. 百卉倅状

(整理番号 41号・赤215)

(大きさ33.6×29.5cm、折帖)

草木の写生帖で、宝暦6年から9年(1756-59)頃の作である。花時の姿を描いた図が大部分だが、カタクリには鉢植えの図が3枚あって、中央が開花した姿、右に花が咲く前、左に花が終わって枯れる前の様子が描かれるなど、その植物の生活史を記録する態度がみられる。

「阿部伊勢侯ヨリ」贈られたと記されたりヨウブ、シロモジ、クロモジ、胡椒(ジンチョウゲ科のコショウノキ)など10種類、「松平播州侯ヨリ」という踊子草(オドリコソウの白花と普通品の2図)、白屈菜(クサノオウ)、白山吹(ヤマブキの白花品で別種のシロヤマブキではない)、梅枝草(ニリンソウ)など11種、「水戸様ヨリ来」と書き込まれた龍眼(リュウガン)など、大名間に博物趣味の交流があったことを示す書き込みもある。

また、本帖には江戸で描かれたトウガラシ52種類の図がある。すべてに品種名が記入され、果実だけの図もあるが、大部分の図に茎葉までが描かれている。果実の形態に現れた変異の大きさだけでなく、当時の江戸における蔬菜類の育種(品種改良)の程度を示す貴重な記録でもある。

### 3. 聚芳図

(整理番号 41号・赤215)

(大きさ30.2×34.8cm、折帖)

主として花(草本)の写生帖で天明年間(1781-1788)の作である。松前産のクロユリ、ミスミソウ、スズラン、シラネアオイ、ハマナスなど熊本には産しない珍しい野草や、薬用に栽培されたテンダイウヤクなどが描かれている。しかし、美しく珍しいものだけでなく、アセビ、コブシ、ダイコンソウ、キズタ、ヤクシソウ、テイカカズラなど、身近で普通に生育する植物も多く描かれている。

熊本県の特産ともいえる分布をするヒゴタイ(ルリ肥後躰と書かれている)やハナシノブ(クサシノブと記され、白花との注記がある)の図は特記すべき存在である。

### 4. 錦繡叢

(整理番号 41号・赤215)

(大きさ32×24.7cm、折帖)

松柏類や竹類その他の樹木の写生帖で、オニバス、オカトラノオ、ナワシロイチゴ、イタドリなどの野草、カニクサ、クサソテツなどのシダ類、菌類のキツネノチャブクロの図なども含まれている。「シラガ姫小松」など葉の一部または全体が白化した植物が幾つも描かれ、このような変異に注目していたことがわかる。

ヤドリギには、「エノキノホヤ」「ムメノホヤ」と区別して描かれた図があり、宿主がエノキの場合とウメの場合が比較してある。また、カラスウリ類の花や果実をいくつも描いたり、古木と若木を並べて記録したりするなど、疑問の点を比較観察して確かめる態度が強く現れている。

### 5. 艸木生うつし

(整理番号 又41号・赤215)

(大きさ27.5×20.5cm、1冊)

雑草木53種類の写生帳で、宝暦11年(1761)頃の作である。生うつし(生寫)とは、「(絵などで)実物とそっくりそのままの姿を写しとること」(広辞苑)である。ヒメコブシ、サクラバラ、イチリンソウなど美しい花が多いが、アサガラやヤブマメなどの雑木雑草の図もある。

メモも貼付してあり、ダンギクには「救荒本草ニ藍菊ト名ツクル者アリ形状遙ニ別ナリ阿蘭本草ニ見ヘタリ蠻言ロウデ。ウイルデ。メンテ。ト称ス肥前州長崎海濱處處ニ多有之」と書かれている。

『艸木生うつし』と読みは同じだが、本冊子とは別に『草木生寫』がある。これは雑草木113種類の写生帳で、宝暦12年(1762)頃の作である。この冊子には野菜や果樹の図もあり、「宮重大根カイワリノ中ニ白キカイワリアリ生寫五六百ノ中ニ、三アル事モアリ」と、発芽したとき葉緑体を欠く双葉があった事例を丹念に記録している。

このダイコンの種子は宝暦10年(1760)6月6日に尾張犬山城主成瀬正泰から贈られたもので、その礼状が『重賢公御代御代筆控』に記録されている。ダイコンは日本で最も品種改良が進んだ野菜で、地域毎に独自の育種が行われ、変異の幅がきわめて大きいことが特徴である。したがって、重賢が宮重大根と品種名で記録したのは、これが熊本人にとって新来の珍しい存在だったことが大きな理由と思われる。

### 6. 花木形状

(整理番号 又41号・赤215)

(大きさ27.4×20.4cm、1冊)

雑木78種類の花を記録した写生帳だが、草本も含まれている。また、花のないカクレミノの枝や地味なハナイカダの花期の図などもある。早春から季節の移り変わりに従って月毎にまとめる形をとり、採集(写生)の場所、名称(漢字と仮名書き)があり、別紙に書かれたメモも貼付されている。

たとえば2月の坐禅草(ザゼンソウ)のメモには、「菩薩草(本草)綱目蒟蒻ノ附録ニ出ツ此艸莖葉冬ヲ凌テ凋ヅ冬春ノ間ニ花サク蒟蒻花ノ如シ内ニ人物座スルガ如シ東都ノ俚人呼テ坐禅草ト称ス疑クハ即此菩薩草ナルベシ此ニ記シテ以テ彷彿ヲ待ツベシ花鏡ニ出ス一辨蓮亦此一種ナリ」と種々の考察が書かれている。

また、このメモから江戸の園芸が華麗な花だけでなく、このような深山に産する特異な花までも既に栽培の対象としていたことがわかる。

## 7. 虫類生寫<sup>いきうつし</sup>

(整理番号 又41号・赤215)

(大きさ27.2×20.2cm、1冊)

昆虫類123種類の写生帳である。各地で採集した昆虫の幼虫や成虫の図が丹念に描かれ、蛹や繭の図もある。採集の場所と日付はきちんと書き込まれ、幼虫は何を食べる虫かという視点で書かれている。また、「カイレ（カイワレ＝羽化し）ソコナヒ クサレタルガ蠅ニナル」という記述も面白い。

領内だけでなく、参勤交代の途中と思われる場所と日付があり、大名行列の道筋と旅程を知ることができる。また、その間採集した虫の籠も殿様の駕籠と一緒に旅をしていたかと考えると微笑ましくなる。

本冊子と別に昆虫図鑑ともいえる『虫略画式』があり、様々な昆虫を、それも大部分が雌雄をセットにして描いてあり、きわめて先駆的な記録といえる。

## 8. 昆蟲胥化圖<sup>こんちゅうしょかず</sup>

(整理番号 又41号・赤215)

(大きさ27.4×20.4cm、1冊)

昆虫類の胥化(変態)を主題に作られた写生帳で、37種類が記録されている。幼虫を食草とともに描き、その後の変化に注目する態度は『虫類生寫』にも現れているが、本冊は、それをより進めたものといえる。

ユズの虫、キンカンの虫、防風(セリ科のハマボウフウ)の虫のように、何を食草としている虫か、それがどのような蛹になり、最後に羽化してどんな虫になるかを描いている。木枠に網を張った飼育箱のようなものが描かれており、その中で飼育したと考えられるこのように、ある昆虫の一生を同じ紙の上に時系列的に記述することは、当時の日本ではきわめて先駆的な手法である。

## 9. 薺・百合・雑<sup>あさがおゆりまじり</sup>

(整理番号 又41号・赤215)

(大きさ27.2×20.2cm、1冊)

花部を主とする写生帳で、天明2年(1782)頃の作である。

アサガオは6図あり、明和2年(1765)5月20日、26日、6月4日、6日と開花の日付がついている。アサガオは平安遷都の頃に渡来した薬用植物で、江戸時代になってから鑑賞の対象となった。それが大流行を迎えるのは文化・文政(1804-29)の頃である。したがって、肥後藩では流行に先立って早い時期から栽培されていたことがわかる。しかし、これと現代の肥後朝顔との直接的なつながりはわからない。

ユリの花51種類とキクの花196種類には品種名までが記入され、名称の記入はないがセキチク(ナデシコ)類の花も55種類描かれている。重賢は、武士の品性向上を目的にキクの栽培を奨励しているので、ここに描かれたキクと現在の肥後菊との関連は気になるが、肥後菊独特の形態をはっきり示す品種は認められない。肥後菊は、その栽培指針となった『養菊指南車』(文政2年、1819)が出た後から品種改良が進んだものと考えられる。

## 10. 群芳帳<sup>ぐんぼうちょう</sup>

(整理番号 25号・赤210)

(大きさ40.3×31.5cm、折帖)

第10代藩主細川斉護の命で作られた肥後花菖蒲の図譜で、89種類の花が描かれている。

アヤメ属は属名のアイリス(Iris)で親しまれているように、世界各地で園芸化が進められた植物である。日本では早くからカキツバタが鑑賞の対象とされ、文学や絵画にも現れている。しかし、ハナショウブの栽培が始まったのは江戸時代末期からである。

ハナショウブの栽培は江戸で始まり、紆余曲折を経て熊本に伝わったのは天保4年(1833)である。ここで独特の発展をした肥後花菖蒲は、別のルートで発展した伊勢花菖蒲、本家の江戸花菖蒲と並ぶ品種群の一つを構成し、日本を代表するアイリスとなっている。

## 1 1. <sup>ぼたんしゃくやくくいぎょうつし</sup>牡丹・芍薬生寫

(整理番号 26号・赤212)

(大きさ27.3×30.3cm、折帖)

安政3年(1856)に絵師・狩野養長に写生させた写生帖で、ボタン31種類とシャクヤク29種類が描かれ、各品種の特徴がよく示されている。

ボタンもシャクヤクも中国で隋の時代から園芸化され、平安時代に渡来したという。豪華な花の美しさが日本人の目を惹き、その姿が絵画や装飾の題材になったが、園芸植物として品種名がつけられるようになったのは江戸時代からである。

両者とも、中国では花弁数が多い八重咲きで花の芯が隠れるのに対し、日本ではボタンは半八重くらいで芯が見える形であるし、シャクヤクはむしろ芯の雄しべ・雌しべの形を重視したことが特徴である。とくに、花の中心に雄しべの約が黄金色に大きく盛り上がる形など、中国では見られない独自のものを生み出している。

ここに描かれたボタンには熊本独特といえる特徴はみられないが、シャクヤクはすべて肥後芍薬である。

## 1 2 <sup>みちのしをり</sup>三千之枝折・押花御道中より

(整理番号 107,31,24)

(大きさ13.9×21.4cm、6冊)

樹木の葉などを貼った押葉帳で、大部分の標本が一枚の葉か枝先の小さい部分である。採集品はカエデ類の葉が最も多く、ハギ類の花やマメツタのようなシダ植物まで採集してある。日付や植物名の記入はなく、次の資料13の押華幞や写生図のような研究材料ではなく、旅の思い出の作品のように思える。

採集地は東海道の吉原、蒲原、油井から始まり、浜松、桑名、伏見、尼崎、久住などを経て熊本まで続き、参勤交代の旅で宿ごとに採集し、その順序で冊子にしたと思われる。

1枚の葉だけの標本といっても、カエデ類の葉は数が多く、その形がいろいろと変異に富んでいて興味深い。このように標本という証拠物件が残されていると、具体的にカエデの園芸化が相当に進んでいたこと、それが全国に普及していたことなどを具体的に示す貴重な資料となる。

## 1 3. <sup>おしほなちょう</sup>押華幞

(整理番号 赤215)

(大きさ27.9×19.1cm、1冊)

各地で採集した植物の標本集で、まず、採集の日付と場所が記入され、名称は漢字(必ずしも漢名ではない)または仮名で書かれている。その後調べたメモを別紙に書いて貼付したり、追記や訂正を加えたりしてあって、これらの標本を繰り返し利用していたことがわかる。

たとえば、ハナシノブの標本は2本並べてあるが、一方には「花ウスムラサキ五葉」他方には「花白五葉」と花の色が記され、採集場所は伏見で、採集年月日は宝暦8年(1758)5月17日と明示されている。名称は白蘚と書かれた下に朱書きで「未詳」と記入され、添付したメモには『本草綱目』の王不留行の一種で「東都ノ俚人呼テ花シノブト称ス白蘚皮ニ充ル者大ニ誤リナリ肥後州波野原ニ此艸尤多シ」と書かれている。

この記載から、ハナシノブが当時江戸や京都で栽培されて白花も作られていたこと、重賢は阿蘇の波野に多く自生すると知っていたこと、日本特産種で阿蘇の波野と山東原野だけに分布するとは知らなかったとしても、本草綱目にある植物とは違うと判断していたことなど、多くのことがわかる。

## 1 4. 肥後國之内熊本領産物帳

(整理番号 14,20,3)

(大きさ31×22.3cm、1冊)

享保19年(1734)、幕府の医官・丹羽正伯が中心となって、各大名領、天領、寺社領ごとに領内の動植物、農作物などの詳細調査が行われた。その結果は、「〇〇国〇〇領産物帳」としてまとめられ、正伯のもとに集められた。それに関連して「〇〇国〇〇領産物絵圖帳」も作成された。250年前に行われた、日本列島全域をカバーする大規模な生物相調査で、これが日本の博物学の発展に与えた影響はきわめて大きい。

しかし不思議なことに、千冊以上あったと思われる報告書の山は、完全に失われて現在には遺されていない。ここに展示した冊子は、熊本藩が幕府に提出したものの「控」である、「絵圖帳」は「控」も失われている。

この産物調査については、後に参考資料としてあげた『江戸諸国産物帳』(安田健、晶文社、1987)に詳しい。

## 15. 雑事紛冗解

(整理番号 4,1,58の2)

(大きさ24.6×18.8cm、3冊)

重賢が調べ、または家臣に命じて調査させた事項を、いろは順に編集した一種の百科事典である。その内容について『肥後文献解題』は「上巻はイからク迄で秤の事、橋の長サ、波奈之丸、泰宝丸等御船の事、牛の毛色等がある。中巻はやからス迄で、八代蜜柑、諸処水の重サ等がある。下巻は雑事で全国稲の名称、肥後藩各地の里程、江戸御屋敷から各地迄の道規等。」と紹介している。稲の品種名は領内各地でも調査され、518品種が記録されている。

## 16. 草木錦葉集

(整理番号 3,7,33)

(大きさ28.5×19.3cm、7冊)

文政9年(1826)に刊行された斑入り葉植物の集大成で、図も添えられている。重賢が没して40年後の刊行だが、重賢が『錦繡叢』や『草木生寫』に記録した白化や斑入りが数多く記録されている。

本書と同時代に江戸で刊行された『草木奇品家雅見』(1827)に記録された斑入りは合計して478種類、整理すると41通りの型になるという。これは江戸の園芸が到達したレベルの高さを示す一つの証拠だが、安永4年(1775)に来日したチュンベリー(日本の植物を多数ヨーロッパに紹介したスウェーデンの植物学者)は、日本人がこのような突然変異体を好んで鑑賞することに驚いている。

# ◇熊本大学薬学部資料

## 1. 本草綱目

(分類番号 499,9/H,85)

(大きさ22.5×15.5cm、38冊)

明の李時珍が著した本草学の名著で、中国の萬歴18年(1590)に刊行された。我が国には慶長12年(1607)に輸入され、寛永14年(1637)に日本で和刻版が出版されている。寛文9年(1669)には翻刻版が出版され、その後も繰り返し翻刻版や校訂版が出版されている。

本来は薬物の書であるが、博物学的内容に富んでいるため、江戸時代を通じて我が国の本草学者や博物学者の最も重要な参考書となった。その貢献の大きさは計り知れないが、同時に、その強大な影響によって生じた障害も大きく、近代的な博物学の発展は『本草綱目』を乗り越えるところから始まったともいえる。

ここに展示したものは寛文12年(1672)版だが、肥後の博物学のもっとも基礎にあった文献の一つといえる。

## 2. 広益本草大成

(分類番号 499,9/Su,96)

(大きさ22.5×15.5cm、10冊)

元禄11年(1698)に刊行され、図画和語本草綱目といわれるように、『本草綱目』の品物を和語で解義したものである。全体が23巻で、第20巻以降が動物となっている。

### 3 <sup>ほんぞうずふ</sup>本草圖譜

(大きさ27×19cm、55冊)

我が国最初の大植物図譜で、著者・岩崎灌園が自ら採集し、写生し、彩色を加えた草木図に簡潔な説明がつけられている。収録した植物は約二千種類、野生種だけでなく多数の園芸植物も掲載している。刻苦研鑽20年以上の歳月をかけて完成した96巻92冊からなる大著で、江戸の博物学の最高峰といわれる。

原稿は文政11年(1828)に完成し、手書きの写本を予約者に配布する方式をとり、最後の巻が配布されたのは弘化元年(1844)である。この本が印刷されたのは大正5年-10年(1916-1921)で、著者の原図をもとにした木版の豪華な原色刷りになっている。

### 4. <sup>ほんぞうずふ</sup>本草圖譜 山草芳草部

(分類番号 499,9/I,96)

(大きさ25.5×18cm、6冊)

本草圖譜は文政13年=天保元年(1830)に山草部4冊、芳草部2冊の木版本ができ、山草部は彩色を加えて幕府に献上された。大正版が作られるまで刻本は、この6冊のみで、それが明治36年(1903)に復刻された。

### 5. <sup>きゅうこうほんぞう</sup>周定王救荒本草

(分類番号 499,9/Ky,8)

校正救荒本草、救荒野譜並同補遺

(大きさ26×19cm、9冊)

救荒図書は、もともと飢餓を救う目的で著され、速やかな普及を目的とするため、通俗的で片々たる冊子であることが多いが、学問的な価値が高いのは松岡玄達が、享保元年(1716)に刊行した『救荒本草』と『救荒野譜』である。この本は、1639年に明で作られた『農政全書』の救荒植物に関する部分その他に訓点を加えて読みやすくし、ところどころに自説を書き加えたものである。植物の産地・特徴の記述が簡潔で、図も要を得ているので『本草綱目』などでは見られない別の趣があり、本草学の博物学化に大きな影響を与えた。

その版木が天明8年(1788)の火災で失われたため復刻が計画され、丁数など松岡本と全く同じ形で小野蘭山が校補を行い、寛政11年(1799)に刊行された。

ここに展示してあるのは、その寛政本である。

## ◇その他の資料

### 1. 藤井家の押葉帳 (大きさ30.3×20.6cm、4冊)

(熊本大学理学部植物標本室所蔵)

藤井家は、代々熊本藩の薬園・蕃滋園の管理者を勤めた家柄である。初代の源兵衛は宝暦6年(1756)の薬園創設とともに栽培管理の役につき、2代景助、3代健吾、4代楠寿、5代景倫と続き、景倫のときに廢藩置県を迎えて薬園は閉鎖された。

この押葉帳は、健吾の養子となって藤井家を継いだ楠寿が天保6年(1835)江戸に遊学し、その後、奥州、北陸、近畿などの諸国を回って採集した標本で、近代植物分類学が熊本に導入される明治30年代まで活用されていた。

## ◇参考資料（机上に出してある書籍は、手にとってご覧ください）

### 1. 蕃滋園位置図（『肥後医育史』より写す）

蕃滋園は細川重賢によって宝暦6年（1756）府内坪井建部（現在の薬園町、肥後銀行子飼橋支店一带）に作られた藩の薬園である。開設当初の敷地面積は528坪であったが、拡張を繰り返し、慶応4年（1868）には1594.5坪となっている。

ここは薬用植物の生産の場というより、その栽培法の試験研究と博物学研究の施設であった。また、農作物の栽培研究も行っていたことが、明治6年（1873）に作成された蕃滋園植物目録から知ることができる。

### 2. 蕃滋園植物目録（『肥後医育史』より写す）

廃藩置県後の明治6年（1873）、蕃滋園最後の管理責任者であった藤井景倫が熊本県の命で作成した目録で、薬園に栽培されていた植物の名称が829挙げられている。この名称は、龍膽（数種）、菊（数十品）などまとめて記載してあるものがあり、また、最後に「以上ノ外日用普通の穀菜数十種アルモ詳載セズ」と書かれているので、実際に薬園で栽培されていた種数は、829より相当大きい数になる。

### 3. 第五高等中学校植物園の記念碑（写真）

重要文化財に指定されている「赤門」に入り、サインカーブの道を白い柵の中門まで進んだ左右が五高の植物園で、「赤煉瓦本館」に向かって右が草本園、左が樹木園であった。

右側は昔日の面影を留めないが、鬱蒼と茂った左側の樹木園に入ると高さ1m（太さ18cm）ほどの石柱が立っている。その南面には「一龍眼樹以下百五十餘種 右故熊本藩薬園長藤井景倫遺族寄付」と2行に刻まれ、西面には「明治廿三年十月建之」と刻まれている。

廃藩置県後の蕃滋園は藤井家の庭園となっていたが、最後の管理責任者であった景倫は明治二十三年に没した。そのため貴重な植物が枯衰するのを憂えた遺族が、その年に新築なって黒髪の地に開校することになった第五高等中学校に寄付し、新設植物園の基礎とした。

この石柱は、その記念の碑である。

### 4. 『肥後の名花譜』（塚本洋太郎・山崎貞士、京都書院、1986）

先に述べた永青文庫資料の9『薺・百合・雑』、10『群芳帖』、11『牡丹・芍薬生写』を復刻印刷した豪華本である。

### 5. 『肥後名花撰』（肥後銘花保存会、誠文堂新光社、1974）

世界に誇る肥後の名花、肥後の風土の中で磨きあげられた園芸植物の全貌を伝える豪華本である。このように他に例をみない独特の花が数多く創出されたことも、肥後の博物学が隆盛であった一つの成果といえよう。

### 6. 『大和本草』（貝原益軒著、1709）

書名は、中国の本草学に盲従せず、日本の動植物の実態を重んじた本草学の意である。益軒自身が国内各地で実物を確かめて得た具体的知識を基礎に記述されており、日本本草学の独立を宣言し実践した書といえる。また、広く読まれることを願って和文で記述されていることも、学術書は漢文で書くという当時の習慣を越えた画期的な態度である。

その木版刷りのものを、白井光太郎らが校注を加えて活版刷りで昭和7年（1932）に刊行した。この有明書房版（1975）は、その復刻版である。



## 7. 『訓蒙圖彙』(中村揚斎、1666)

我が国最初の絵入り百科大事典といえる22巻10冊の図解啓蒙書である。天文、地理、人体などの項目から始まるが、大半が動植物にあてられている。図は概ね正確で科学的に描かれ、各図には和漢名のほか短い注解がついている。

本書(早稲田大学出版部、1975)は、その原本10冊を縮小復刻し、杉本つとむが解説と索引を加えたものである。

## 8. 『和漢三才圖會』(寺島良安、1713)

江戸時代中期に刊行された図説百科事典で、105巻81冊の大著である。たびたび後刷りされたようで、自然に関する知識の普及啓蒙に大きく貢献した。現在でも当時の博物学の状況を知る重要な資料である。

本書(和漢三才圖會刊行委員会、1970)は、その原本を縮小復刻して上下2冊にまとめたものだが、目次や索引を活字で追加したので、現在に我々にとって使い易くなっている。

## 9. 『物類品隲』(平賀源内、1763)

全体の構成は『本草綱目』によっているが、内容は自らの観察を中心に具体的に記述されている。また、時代の反映として西洋から流入した学問や事物の影響もあって、独創に富んだ博物誌となっている。

蜜産のダリュウなどの図に、薬水を以て硝子瓶中に蓄える図と説明されているが、その図は『毛介綺煥』の図と似ている。

本書(八坂書房、1972)は、その原本6巻を縮小復刻し、杉本つとむが解説を加えたものである。

## 10. 『花彙』(小野蘭山・前田充房、1759-65)

これまでの本草学とは全く異質な、実利をはなれた純粋な植物図譜で、我が国最初の科学的植物図譜といわれる。図は著者らが自ら描き、葉の裏面を黒く刷る独特の木版図の技術もすぐれている。

本書(八坂書房、1977)は、その原本8巻を縮小復刻して上下2冊にまとめ、奥山春季が解説を加えたものである。

## 11. 『本草綱目啓蒙』(小野蘭山、1803-1806)

書名からは『本草綱目』の啓蒙書のように受け取られるが、綱目の順序に従って水火金石草木鳥獸虫魚など天然に産するものをあげながら、その名称、異名、産地、産出の状況、形態、利用などについて蘭山の見解を詳しく、しかも平易な和文で記述したもので、日本の本草学の終局点を示す名著といわれる。

木版刷りと綴じ48巻の大著だが、好評で3回も版を重ねている。これは、本書が本草学の枠を越えて自然と生活の博物学の性格を持っていたことと、大名から庶民までが花や草や虫に知的満足の楽しみを求めた時代の反映ともいえる。

ここに展示したものは、杉本つとむ編(早稲田大学出版部、1974)の活字印刷版である。

## 12. 『本草図譜総合解説1-4』(北村四郎他、同朋舎、1986-91)

『本草図譜』については、前に薬学部資料3で述べたが、本書は昭和55年-56年(1980-81)に刊行された、昭和原色写真版『本草図譜』(92冊)の総合解説書である。図を単色で4分の1に縮小して上段に置き、下段に解説を書き込んだものになっている。原色版の豪華さはないが、活用されやすい形になっている。

## 13. 『江戸諸国産物帳』(安田健、1987、晶文社)

さきに永青文庫資料14『肥後國之内熊本領産物帳』で述べた諸国産物調査を全国各地に遺された「控」から探求し、事業の内容と背景、影響などを明らかにした労作である。

14. 『筑前國産物帳・筑前國産物繪圖帳』(西日本新聞社編・刊、1975)

幸運にも現代に遺された筑前の国の産物帳と絵図帳を、全文翻刻したものである。

15. 『<sup>ざつじんじょうかい</sup>雑事紛冗解』(花岡興輝編、出水叢書、1990)

さきに永青文庫資料15として展示した原本を翻刻したもので、写真版とともに全体が活字にされている。

16. 『世界大博物図鑑1—5』(荒俣宏、平凡社、1987—91)

各国の、いろいろな時代に描かれた動物図の名画でつくられた図鑑である。原図より縮小して印刷してあるとはいえ、その意味では最も贅沢な図鑑といえる。これら世界の一級品と比較してみて、重賢の図が全く遜色のないものであることに注目してほしい。

17. 『殿様生物学の系譜』(科学朝日編、朝日新聞社、1991)

細川重賢を筆頭に、江戸時代から現代まで博物学の分野で活躍した殿様たちの記録で、その活動を通して博物学と江戸文化の特性がみえてくる。

18. 『肥後医育史』(山崎正董、西海時報社、1929)

旧藩時代からの熊本で行われた医学教育の歴史で、著者は当時の熊本医科大学学長である。旧藩時代の記載が詳しい貴重な資料であるが、とくに博物学に関する部分は上妻博之(当時九州学院教諭)の史料によっている。

上妻は熊本の植物研究の大先達であるとともに、熊本の近世史研究に不可欠の基礎資料である『肥後文献解題』の著者でもある。肥後の博物学は、その植物研究と歴史研究との交点にあり、上妻によって研究がきり拓かれた分野である。